

ヨーゼフ・ロートの『ラデツキー行進曲』

——「比較」と「繰り返し」のモチーフをめぐる——

片 桐 智 明

本稿で扱うヨーゼフ・ロートの代表作、『ラデツキー行進曲』がその題名をかりてきている著名な行進曲は、言うまでもなく、今日でもなおかつてのオーストリア帝国を象徴する音楽であり、毎年恒例のウィーン・フィルの新年を祝うコンサートでも常に演奏され愛され続けている音楽である。いわんやロートがこの作品を発表した1930年代においては、瓦解し、無数の小国に分裂したかつての広大なオーストリア＝ハンガリー帝国に対する記憶は新しく、その過去の日々をこの題名から鮮やかに蘇らせた人々は数知れなかったであろう。そのような時代にロートがこの作品にこのようなタイトルをつけた意気込みとこだわりは、推して測ることができるだろう。

ロートはこの作品を新聞紙上で発表開始するにあたって¹⁾、『私の小説『ラデツキー行進曲』への緒言』²⁾として寄せた文章の冒頭に次のように書いている。

歴史のおそろしい意志が私の古い祖国、オーストリア＝ハンガリー君主国を粉碎した。(874)

この『緒言』の中でロートは作品のテーマ、作品を書く動機に関して、歴史を体験した人物としての立場、すなわち、歴史という劇の中の登場人物としての立場と、³⁾ その歴史を描く小説の作者としての立場、あるいは、歴史という劇を批判的に観る観察者としての立場と⁴⁾を混ぜ合わせて語っている。ロートの拠って立つこの立場は微妙な均衡の上に成り立っている。それは、作者自身が作中人物たちとの同時代性を意識することによって、歴史をその内部と外部から同時に見渡すことを可能にする立場と言えるものである。この『緒言』によれば『ラデツキー行進曲』の中でロートは、無情な歴史の歩みが呑み込み踏み潰していく個人

の生、個人を巻き添えにしたオーストリア＝ハンガリー君主国の世界の崩壊のプロセスを描き出すことを主題としている。ロートの立つ微妙な立場はロートの語り方と物語の構成にそのまま反映している。

ロートは彼の語りの中心にトロツタ家という一族を選んだ。そして歴史の展開に同期した彼らの生を描いた。しかしロートの語りは時として、彼らの生の中に過度に没入してしまう。それはロートが『ラデツキー行進曲』に付けた『緒言』の中で、自らの体験に触れ、その体験を基盤にしてかつての君主国を語ってしまう、語らねばならなかったことにも現れている。またこの作品を厚く包み、魅力的なものとしている深い憂愁の気分は、かつて栄華を誇ったこともある君主国の崩壊の過程そのものよりも、その世界の中で満たされることなく生を送らねばならない主人公カール・ヨーゼフの哀しみとそれに対する語り手の共感によって、より色濃く醸し出されているといえる。

ロートがこの作品において歴史そのものを描こうとしていたとするならば、この作品は決して作者の意図を十全に反映しているものとはいえないだろう。この作品の中で語られる歴史はすべて登場人物の行動と心理に有機的に深く結びついている。それらは決して歴史そのものとして語られることはなく、登場人物たちの体験を通して語られるのである。⁵⁾ ロートにとってこの作品が捉えるべきものはまさにこの登場人物たちの体験そのものだったのである。ロートは『緒言』の結びに次のように書いている。

過ぎ去りゆくもの、吹き飛ばされゆくものから、記憶すべきものそして同時に人間的に特徴的なものをしっかり捉えることは作家の義務である。作家は、歴史が、どうやら盲目的にそして軽率に、没落させる個人の運命を拾い上げる使命を持っているのである。(875)

さて、本稿の目的は、『ラデツキー行進曲』に特徴的なモチーフに着目し、そこに描き出されている、ロートの関心の的であった「個人」の人物造形と彼らの体験の描かれ方について考察していくことにある。またその過程で上に述べたようなものとしてこの作品におけるロートの語りの立場を捉えると、登場人物たちの描かれ方と彼らの体験の描かれ方、すなわち、「個人の運命」を通して、ロートが捉えた歴史と世界の一面が垣間みえるはずである。

1. 「比較」と「繰り返し」

本稿ではすでに論題として示したように、「比較」と「繰り返し」という二つのキーワードを中心に論を進めていく。結論から先に言ってしまうと、『ラデツキー行進曲』という物語はさまざまな形で「比較」や「繰り返し」に満ちている。⁶⁾ それは主に祖父と孫という二つの人物類型の間の関係に集約され、孫の視点からの祖父との「比較」、祖父の行為の「繰り返し」として現れているのである。

本稿では主に孫のカール・ヨーゼフと祖父のソルフェリーノの英雄との間にある関係を通して、カール・ヨーゼフの生と彼にとっての世界を見ていくことになるが、まず、孫カール・ヨーゼフによって行われる祖父との「比較」のひな型と見なすことのできる一つの「比較」を見ておきたい。それはヨーゼフ・トロッタがかつて皇帝の命を救ったときの（国家の視点から見た）英雄的行為の顛末を描いた、まだ幼い息子フランツの読本の教科書を読み、憤った彼の次の言葉に現れているものである。

「わしが濫用されたのだ」（中略）「濫用とはどんな具合に」と法律家はたずねた。「わしはいまだかつて騎兵隊につとめたことはない」（後略）（146）

もちろんここには直接的な「比較」の表現などありはしない。しかし、ソルフェリーノの英雄は明らかに、子供向けの読本に描かれていた彼の姿と、彼自身の実際の姿を「比較」しているのである。彼は、そこに描かれていた現実の自分とは違うものに憤り、彼自身の虚像の出現に対して抵抗したのである。

またこの第一章にはもう一つ「比較」という言葉によって捉えることのできるものがある。それはヨーゼフ・トロッタが晩年に手に入れた彼の肖像画に関してである。彼はその肖像画をためつすがめつして見る。

彼はようやく今になって自分の顔というものを知ったのだった、彼はときどき自分の顔と無言の対話を交わした。それは彼のうちに今までついぞ知らなかった想念、思い出、捉えがたいすばやく消えてしまう物悲しさの影を呼び覚ました。彼ははじめて、老年の始まりと自分の大きな孤独を経験するために、描か

れたものを必要としたのだった。絵の描かれたカンバスから、それら、老年と孤独とが、彼に向かって押し寄せてきた。いつもこんなだったろうか、と彼は自問した。いつもこんなだっただろうか。(153f)

ここでは彼は自分自身を捉え直すために、自らを描いた肖像画と自分自身を見比べるのである。ここではもう自分の現実の姿も偽られた姿もない。自分の顔と肖像の顔とを明らかに「比較」してはいるが、「比較」によって生み出される何らかの差異はすでに問題ではなく、捉えがたい自分の本当の顔、老年と孤独という自分の歩んできた人生の中に埋もれていこうとしている本来の姿を見つめているのである。ここにおいて「比較」はその本来の機能、すなわち差異の顕在化という機能を失ってしまっているとも言えるだろう。そして「比較」は差異ではなく、むしろ統一されたもの、具体的に言えば、年老いたヨーゼフ・トロッタの自己像を生み出そうとする力場になっているとも言えるだろう。

ここに挙げたヨーゼフ・トロッタの二つの「比較」の例ではどちらも、いわば分裂した自分の姿、統一されていない自分の姿を、照らし合わせ、「比較」することによって捉え直すという行為が行われていると言えるだろう。というのもこの第一章においてヨーゼフ・トロッタは「ソルフェリーノの英雄」や「スロヴェニアの小百姓」といった複数の呼称を用いて描かれ、いわばヨーゼフ・トロッタという一つの名前を帯びてはいるが、複数の相に分かれている人物として描かれているのである。そしてこのヨーゼフ・トロッタが抱えている自己像の分裂と分裂した像から統一を作り出そうとする試み、すなわち「比較」が（もっともカール・ヨーゼフの場合、自分に対する祖父という新たな要素が加味されてくるのだが）、後になって孫のカール・ヨーゼフに繰り返されることになるのである。

次に、「繰り返し」というのは、端的に言えば第一章をこの物語全体の原型として読むことによって、必然的に生じてくる考え方である。つまり、ソルフェリーノの英雄の孫、カール・ヨーゼフの人生は祖父の人生の（こう言ってよければ）出来の悪い「繰り返し」である、と言える。⁷⁾

もっとも明瞭な「繰り返し」の例を次に挙げよう。これはカール・ヨーゼフが所属している連隊の駐屯地の近くで起きた労働者の暴動でカール・ヨーゼフが負傷する場面である。

明らかに無意味な偶然がソルフェリーノの英雄の孫にも鎖骨の負傷を授けたの

である。(ついでながらもしかすると皇帝は別かも知れないが、生きている者は誰一人としてトロッタ家の興隆がソルフェリーノの英雄の鎖骨の負傷に負っていることを知りようがなかったであろう。)(338)

ここでは「無意味な偶然」としながらも、語り手と読み手にとって明らかに意味がある作為によって、英雄の負傷が英雄の孫に繰り返されている。そしてご丁寧に語り手自身がそのことを読み手に思い出させるように注釈を付けてくれてさえている。読者はこの語り手の親切心に注意を向けねばならないであろう。

また、この物語は上の例のような「繰り返し」とはまた違う位相で論じられるべきさまざまな形での「繰り返し」に満ちている。

それは、例えば、時の刻みのように規則的な郡長の日々の生活や、駐屯地での兵たちの生活、毎週日曜日ごとの軍楽隊の演奏に現れている。そしてその中でも最たるものが『ラデツキー行進曲』のメロディーなのである。

2. 相似と相違

『ラデツキー行進曲』の主人公カール・ヨーゼフ、ソルフェリーノの英雄の孫である彼と英雄その人との関係は、この小説の主筋の一つを構成しているものであり、終始この二人の間の関係を軸として物語が進展していくと言うこともできる。この関係はたとえば第一部第三章では次のようなかたちで示される。

「すべてが順調に行くことを願っているぞ。おまえはソルフェリーノの英雄の孫だ。そのことを忘れるな、そうすれば何事も起こりようがないのだ。」陸軍大佐も、すべての教官も、すべての下士官もそのことを忘れてはいなかった、だから本当にカール・ヨーゼフには何事も起こりようがなかったのである。馬に乗るのは優秀ではなかったし、地形学も不得意であったし、三角法ときたらからっきしダメだったにも関わらず、彼は「立派な席次」で試験に合格し、少尉に任官し、第十槍騎兵連隊に配属されたのである。(169)

もちろんソルフェリーノの英雄の騎乗技術や地形学や三角法の理解の度合いが引き合いに出されているわけではないが、カール・ヨーゼフという人物が常に皇

帝の命を救ったソルフエリーノの英雄の孫である人物としてアイデンティファイされていることを示している。もっともこの時点では英雄の孫と英雄の関係はまだ明瞭な「比較」というかたちで提示されてはいない。またここでは単にカール・ヨーゼフに関する事実のみしか語られておらず、それに対してカール・ヨーゼフがどのような意識を持ち、どのような態度をとったかは語られてはいない。

語り手がこの二人の間にはっきりと明示された形での相互の「比較」の対象という概念を持ち込むのは、父フランツの古い友人、かつて英雄の肖像を描いた画家の観察を通してである。それが他でもない画家の目による観察ということが大きなポイントになることは言うまでもない。

「すごいな、ソルフエリーノの英雄にそっくりじゃないか。ちょっと優しいだけでな。鼻が弱々しい。口元も優しい。しかし時がたてば変わるものな…」
(176)

もちろんこの画家の観察は孫のカール・ヨーゼフと祖父ヨーゼフとの外見に関する「比較」にすぎない。しかし画家の観察眼というものが時に、単なる外面の観察にとどまることなく、対象の内面に深く切り込むことがあると言う、読者のもつ一般的な通念によって、そこにおいて用いられる二つの形容、「優しい」と「弱々しい」という表現が単にカール・ヨーゼフの外見上の特徴にとどまるものではないという印象を与えるのに成功し、なおかつ語り手による一方的な観察の披瀝以上の信憑性を読者に与えることにも成功している。

まず最初に「そっくり」であるとしておきながら、二の句、三の句と続くにつれ、二人の間の違いを指摘していく。言葉を継ぐことによって、違いばかりが強調されていくのである。そしてそれもただ違うと言うのではなく、祖父に比べて孫が「弱々しい」ということを明示するのである。そして最後にくる「時がたてば」は、孫が現在の時点では祖父とは似ているとはいっても明らかに違うが、いつかは祖父の英雄のような人物になるかもしれない（また、そうはならないかもしれない）として可能性だけを提示し、この比較をこの後の物語の展開に委ねるのである。

画家は観察し、画家の知っている英雄と眼の前にいる英雄の孫とを明らかに見比べている。そしてその二人の面影の間に確かに相似点を見いだすが、その二人の間に明らかな違いを指摘する。孫は英雄の再来、すなわち、「繰り返し」のよ

うに見えるが、実際は「繰り返し」ではないことを看破するのである。つまり、一見両者の間の相似を指摘しているように見えながらも、むしろその実、両者の間の相違を明確にし、その相違をこれから語られるであろう物語の下地として示しているのである。

また別の形でこの「比較」と決って同じものとはならない「繰り返し」のモチーフが鮮明に浮かび上がる箇所がある。それはたとえば娼家の暖炉の上の皇帝の肖像をカール・ヨーゼフが救出する箇所である。というのもカール・ヨーゼフに可能であった皇帝の救出は、帝国中に無数にばらまかれた皇帝の肖像、すなわち、皇帝の「コピー」の救出にすぎず、決して「コピー」に対する「オリジナル」の、本物の皇帝の救出と等価たりうるものではないからである。また、カール・ヨーゼフと従卒オヌフリィの関係に対して、英雄と召使いジャックの関係も、同様にこのような似て非なる「繰り返し」としての特徴を有していると言えるだろう。

ここで本稿で用いる「比較」と「繰り返し」という言葉を確認しておく必要があるだろう。言うまでもないことだが一般にこの二語はともに、たとえばAとBという二つのものあるいはことの間の関係を語るときに用いられるものである。これら二つの概念とも本稿では、当然のことながらカール・ヨーゼフとその祖父とを中心に見るため、カール・ヨーゼフに対して半ば呪詛的に響き続ける祖父の存在と偉業、そしてそれに対する、カール・ヨーゼフの存在のあり方と行為の間の関係を指すものとして用いる。しかしそれは決してこのトロッタ家の祖父と孫の間にのみに限定されるものではない。後にも触れるが、トロッタ家の祖父と孫の関係は、ドクトル・デーマントとホイニツキー伯爵のそれぞれの祖父に対する関係という二つのヴァリエーションを伴っているからである。

さて、カール・ヨーゼフは英雄の息子である父に命じられたように、おりにふれ祖父の存在を思い起こす。彼が祖父を思い起こすこと、ただそれだけですでに、彼と祖父の間には「比較」の関係が成立してしまうことになる。そしてその「比較」は祖父と自分の間に確かに存在する相違を解消することを目指していながら、先に引用した画家モーザーの観察にも現れていたのと同じく、相似を求めることによってむしろ相違が強調されてくるという皮肉が現れてくるのである。

一方「繰り返し」について言えば、ハーブスブルク君主国という世界の支柱である皇帝を救ったほどの英雄である祖父の人生と行為に対して、カール・ヨーゼフの実際の行為は、常に未然に行われることが妨げられた「繰り返し」として現

れてくる。つまりここで言うカール・ヨーゼフの行いいうる「繰り返し」とは、意図されはしたが結果的に完全には決して成功しない、つまり失敗する「繰り返し」である。

ではこのように確認した上で章を改めて、カール・ヨーゼフとその祖父の間にある「比較」と「繰り返し」についてさらに深く立ち入って考察してみよう。

3. カール・ヨーゼフ

すでに引用したように、常人より鋭い観察眼をもっていると思われる画家の眼によって権威づけられた、外見上の二人の類似と内面的な相違は、カール・ヨーゼフの軍人としてのキャリアの開始とともに、カール・ヨーゼフ自身に、また読者にも鮮明に語り明かされるようになる。それはカール・ヨーゼフの感傷として次のように語られる。

フォン・トロッタ男爵であるカール・ヨーゼフにとって馬などはどうでも良かった。ときどき彼には自分の中に先祖の血が感じられることがあった。彼らは騎士などではなかった。(中略) 祖父の父もまだ百姓であった。ジポーリエというのは彼らの出た村の名前だった。ジポーリエ、この名称にはそんな古い謂れがあったのだ。そんなことは今日ではスロヴェニア人にもまず分からないことだった。しかしカール・ヨーゼフは自分はその村を知っているのだと信じていた。喫煙室の装飾天井の下にぼんやりとかすんで掛かっている祖父の肖像のことを考えると、その村が見えたのである。それは未知の山々の間にたたずみ、未知の太陽の輝きのもとに、粘土と藁のみすぼらしいあばら屋を抱えていた。美しい村。やさしい村。その村と交換なら将校としてのキャリアをなげうってよかった。

ああ、自分は百姓ではないのだ。自分は男爵であり、槍騎兵勤務の少尉なのだ。他の人々のように町中に自分の部屋を持ってないのだ。(193)

ここではカール・ヨーゼフは、英雄であり、かつ農夫でもあった祖父をあこがれをもって想起しており、また幻想の中で祖父と同一化しているかのようであるが、その想起は即座に現在の自分との対比に結び付けられ、さらにその結果、嘆

きにと変わる。まるで現在の自分が男爵であり、槍騎兵連隊勤務の少尉であることによって、本来もっているはずであった美しい村での生活を取り上げられたとも言えるかのである。祖父の英雄はそれに対して、つまり、美しい村での生活を失った不完全な自分に対して、郷里の大地に結びついた完全な人物として思い起こされていると言えるだろう。また別の観点からみれば、祖父は祖先の農夫たちとの連鎖を保ち続けている過去の一部として現れているとも言える。

この後、繰り返し語られるカール・ヨーゼフによる自分自身と祖父との比較には、常にあこがれと感傷がつきまといっている。これらの比較における対立項には、現在と過去、不完全と完全、実現不可能と実現と言ったようなレッテル張り、総括が可能である。もう一つ例として引用しておこう。

途方に暮れたようにカール・ヨーゼフはほほえんだ。ぼく以外のものだったら、と彼は考えた、こんな時何か愛想の言葉の一つでもかけたやれただろうに。彼の後をオヌフリィがついてくる様は感動的だった。実のところ彼はオヌフリィのことを今まで一度もよく見たことがなかったのである。彼には名前を覚えられないでいる間は顔をじっと眺めることもできなかった。まるで毎日のように従卒が変わるかのようだった。他の連中ときたら自分の従卒のことをまるで女や、服や好物や馬についてしゃべるような調子でいかにもわきまえた口ぶりでしゃべっているのに。カール・ヨーゼフは、話が召使いのことになると、家の老ジャックのことを、祖父にだって仕えたことのある、老ジャックのことを思い浮かべるのだった。老ジャック以外の召使いはこの世にいないのだ。今オヌフリィは彼の前に月の光に照らされた国道の上に、胸郭を大きく膨らませ、ボタンをきらきらさせながら、ぴかぴかに磨き上げられた長靴を履き、平べったい顔に、少尉に会えた喜びを一生懸命に隠して立っていた。「休め」とカール・ヨーゼフは言った。

できることなら何かやさしい言葉をかけてやりたかった。祖父だったらジャックにそうした言葉をかけてやっていただろう。(197)

「祖父であつたらできたであろう」という思いは、軍人としてのカール・ヨーゼフに対して呪縛のように機能する。このとき、実際にソルフェリーノの英雄がそれを行うことができたかどうかは問題になることは決してない。ただカール・ヨーゼフには、祖父の英雄であればできたであろうと思われるという、一方的な

思いこみが重要であるのは言うまでもない。⁸⁾

比較の対象が現実存在するのではなく、ただ観念の中に存在するということに、カール・ヨーゼフが陥る危機の最大の問題点があると言える。

カール・ヨーゼフの自我は、自分をソルフェリーノの英雄の孫として同定する事によって形成されている。ところがそのソルフェリーノの英雄の姿は、英雄自身とは決して同一のものではなく（あるいは、同一のものである必要はなく）、彼がイメージする祖父であり、英雄自身が否定しようとした教科書の中の理想的な存在に類するものなのである。⁹⁾

カール・ヨーゼフが首筋に感じる「祖父の暗い神秘的な眼差し」(198/247)は、父の家の喫煙室の薄暗がりには掛かっている祖父の肖像画から発するものに他ならず、決して祖父その人が彼を見つめているわけではないのである。

このようにただ観念の中に存在し、自分自身の理想像に限りなく近づけられた、というより、理想像そのものである過去の祖父と対比した自己の現在は、英雄である祖父のどうしようもなく出来の悪い「繰り返し」、ぼやけた「コピー」に他ならない。そして、祖父にできたことと自分にできないことを対比して感じれば感じるほど、彼は彼のおかれた世界の中で、祖父の行為の再現すらできない自分自身の不能性と、もっぱら祖父という過去を指向した彼の世界の閉塞を痛感させられることになる。

カール・ヨーゼフと連隊付き医官のドクトル・デーマントとの会話によって、このことはよりはっきりと語られる。ドクトル・デーマントは、カール・ヨーゼフとの相応をはっきりと示すために、ユダヤ人の居酒屋の主人であった祖父の影を背負って登場する。次の引用はすでに上で触れたカール・ヨーゼフが娼家の暖炉の上から皇帝の肖像画を救出する場面である。

彼はカール・ヨーゼフが皇帝の肖像画を隠したポケットを指さした。おじいさんも皇帝を救ったんだな、とドクトル・デーマントは考えた。カール・ヨーゼフは赤くなった。「ひどいですよ」と彼は言った。「どう思いますか。」「何も」ドクトルは答えた。「ただあなたのおじいさんのことを思い出しただけです」「ぼくはソルフェリーノの英雄の孫です」とカール・ヨーゼフは言った。「ぼくには陛下をお救いする機会がありません、残念なことに」(209)

カール・ヨーゼフにとって不幸なことは、言うまでもなく、彼が救うことで

きるのは、すでに皇帝その人ではなく、帝国中に何万枚となくばらまかれた皇帝の肖像画でしかないということである。「コピー」が救うことのできるのは、所詮、「コピー」でしかないということが、この情景の皮肉な物悲しさをよく顕している。そして重要なことは、カール・ヨーゼフが自分には「オリジナル」の皇帝を救い出す機会が与えられていないと知りながらなお、その機会を求めていることである。

一見すると繰り返されているようにも見える皇帝の救出劇は、単にそのように見えるだけで、カール・ヨーゼフ自身にもその「繰り返し」の試みが、意図の中にあるだけで、何一つ実現していないことが明らかなのである。

このようなカール・ヨーゼフの、自己を否定するばかりの「比較」と成就しない「繰り返し」という袋小路から脱出する道を示すのは、やはり、似た者同士として導きいれられたカール・ヨーゼフと「兄弟のような」ドクトル・デーマントである。¹⁰⁾

ドクトル・デーマントとカール・ヨーゼフの間の親近性は次のように語られる。

「こんなにたくさんの死者がいるんだよ」と連隊付き医官が言ったものだった。「君も死者によってわれわれが生きていると覚えることはないかい。」「ぼくは祖父によって生きています」とトロッタは言った。(中略) 連隊付き医官の言葉からは何か兄弟のようなものが響いてきた、ドクトル・デーマントの心からは小さな炎のように、兄弟のようなものが鳴り響いた。「私の祖父は」と連隊付き医官は言った。「年をとった、銀色の髭を蓄えた大男のユダヤ人だった。」カール・ヨーゼフは銀色の髭を蓄えた年をとった大男を見た。彼らは孫だった、二人とも孫だった。(220)

では、このようにカール・ヨーゼフと同類項であるデーマントはカール・ヨーゼフに、「こんな軍隊は辞めたまえ」(424)と忠告する。では次に章を改めて、デーマントがどのような人物に描かれているかを見てみることにしよう。

4. ドクトル・デーマント

ドクトル・デーマントは、彼の妻がカール・ヨーゼフと浮気をしているという噂が流れたことで、名誉棄損を名目に決闘を行い、その場で命を落とすことになる。決闘による死は、彼自身によれば、もっとも彼らしくないものであった。

私は明日、英雄のように死ぬだろう、いわゆる英雄のように、私の流儀にまったく反して、私の祖先や私の一族の流儀にまったく反して、私の祖父の意志にまったく反して。(234)

というのももっともなことで、彼の出自がユダヤ人だったからなのだが、彼にしてみれば、彼が連隊付き医官として軍隊にいたこと自体が、彼の流儀に反したものであった。¹¹⁾

デーマントは自分とカール・ヨーゼフの生と死について、自分たち二人の間の共通性をことさらに強調しながら次のように語る。

「君はソルフェリーノの英雄の孫だ。ソルフェリーノの英雄だって同じように無意味な死に方をするところだったんだ。彼のように信念をもって命を捨てるか、私たち二人のように意志薄弱に命を捨てるかというのでは違いがあるけれど。」彼は黙ってしまった。「私たち二人のようにね」と彼はしばらくして話し始めた。「私たちの祖父たちは私たちに、たくさんの力は遺してくれなかった、生きるための力を少ししか遺してくれなかった、無意味に死ぬのにちょうど足りるくらいの力しか。ああ。」(234)

デーマントはここではまだ自分たちと祖父たちの生を「比較」し、自分たち、とりわけカール・ヨーゼフの生を、祖父の生の弱められた「繰り返し」として捉えている。¹²⁾ だからこそ、最後の言葉は嘆きに終わることになるのである。ここではデーマントもまだ祖父の呪縛から脱することができていないのである。

ユダヤ人の居酒屋の主人と、皇帝の命を救った英雄を、それぞれ祖父にもつ二人の生は、それぞれの祖父の生に対して、弱々しい力ないものであるとデーマントは言う。事実、それはすでに述べた二つの皇帝の救出劇の間の落差にも明らか

に現れている。

ところが「君も孫なのだ」(237)と言った直後、デーマントは突然うってかわってカール・ヨーゼフの行うことのできた皇帝の肖像画の救出を「ひどくくだらないことだ」(238)と吐き捨て、軍隊を「愚劣」と切り捨ててしまう。このとき彼には「トロッタ少尉が、ソルフェリーノの英雄の孫が、別の世界の人間のように、まったく見知らぬ人間に思われた」(237)のである。デーマントがこのように感じたのは、かつての自分自身がこだわっていた、カール・ヨーゼフがそのときもおこだわり続けていた観念を、このとき振り解くことができたからであろう。このような飛翔の契機をデーマントに与えるのは、カール・ヨーゼフの生きることに対する不安である。祖父に比したときの孫の世代の不安におびえる姿の矮小さを目の当たりにしたとき、それまでの彼自身の生の矮小さに牙を剥くのである。

デーマントに関してもう一つ注目に値するのが、決闘の場面でデーマントが突然、眼鏡なしでもはっきりとものが見えるようになったことである。デーマントは強度の近視であった。それでも「医学的観点からは説明のつかない」(241)のに、突然に決闘に際して眼がはっきりと見えるようになるのである。

「諸君」という声がした。このとき連隊付き医官ドクトル・デーマントはいつもの習慣で仰々しく眼鏡をはずし、注意深く大きな木の切り株に置いた。ところが奇妙なことに彼には、自分の前方に、道も指定の場所も、自分とタッテンバッハ伯爵の間の距離も、伯爵自身もはっきりと見えるのであった。彼は待った。最後の瞬間まで彼は眼の前に霧が立ちこめるのを待った。しかしすべては、まるで連隊付き医官がこれまで決して近視であったことなどないかのように、はっきりしたままだった。数える声がした。「いち。」連隊付き医官はピストルを構えた。彼は再び自由と勇気を、それどころか自負心を、彼の人生ではじめて自負を感じた。(241)

これは奇跡でも何でもなく、デーマントが彼の眼を曇らせていたものを克服したからに他ならないだろう。彼の近視は、自分を祖父の孫として過剰に意識し、祖父たちが「生きるための力を少ししか遺してくれなかった」、そして、自分たちは「無意味に死ぬ」という考えに取り憑かれていたこと、つまり、彼が自分自身の眼で自分の生を見ていなかったということによるのである。

デーマントがカール・ヨーゼフに遺したサーベルに刻み込んだ言葉、「元気で自由に生きたまえ (Lebe wohl und frei!)」(254) という言葉の意味はここにあるのだろう。

5. ホイニツキー伯爵

カール・ヨーゼフに眼を戻す前に、カール・ヨーゼフとソルフェリーノの英雄の関係のもう一つのヴァリエーション、ホイニツキー伯爵とその祖父について簡単に触れて置こう。

ホイニツキー伯爵という人物は、皇帝のことをフランツ・ヨーゼフと呼び捨てにし、フランツ・トロッタの度肝を抜くような人物である。彼は君主と君主国を愛してはいるが、それらに対して形式的な敬意を表明しない人物として描かれている。

ホイニツキー伯爵の祖父に対するスタンスは、上に見たデーマントのものとも、むしろカール・ヨーゼフのものとも、かなり大きく異なっているのは確かである。¹³⁾

ホイニツキーは祖父は錬金術を試みていたと言い、自分の仕事はその継承だと次のように言う。

「私は仕事をしています。いわば楽しみに仕事をしているのです。私の先祖たちの伝統を継承しているだけでして、正直に申しまして、私の祖父がまだ考えていたようには、いつもまじめに考えているわけではありません。この地方の農民たちは彼を大変な魔法使いと考えていまして、そしてひょっとしたら彼は実際にその一人だったのかも知れません。私自身をも彼らはその一人と考えているのですが、私は違います。私は今までのところまだ塵一つさえ作り出すことに成功していないのですから。」(288)

確かにホイニツキーは祖父の行為を「繰り返し」ていると言う。ただし、その行為への取り組み方がカール・ヨーゼフやデーマントの場合とは明らかに異なっている。またホイニツキーはこの二人と違って、あっさりと祖父との違いを認め、自分と祖父がまったく別個の存在であることを知っている。ホイニツキーと彼の

祖父との間には、他の二人の間には見られない、イロニーを仲介とした距離が存在する。ホイニツキーは、デーマントが足掻いた末に獲得した自由を、端からもっているのである。彼はまたこうも言う。

「自分でも厳密には言えないのです」とホイニツキーが続けた、「自分が本気でいるのか、そうでないのか。確かに朝ここ来ると、ときどき情熱が私の心を捉えることがあります、そして私は祖父の遺した処方を読み、そこに行き、実験してみて、さんざんに笑って、立ち去るのです。そしてまたここにやってきては、また実験してみるのです。」(289)

ホイニツキーが彼の祖父に対してもつ関係は、彼が祖父の営為を笑い飛ばすことができるということに特徴づけられている。ホイニツキーと彼の祖父の間には、カール・ヨーゼフとソルフェリーノの英雄との間にあるような関係は存在していないと言うことができるだろう。確かに、ホイニツキーが彼自身の言う「ニトログリセリンと電気」(291)の時代に錬金術の実験を繰り返すことは時代錯誤も甚だしい。それはホイニツキーも祖父の行為を引き継ぎ、繰り返さずにはられない孫であることを示している。しかしその一方で彼がこの実験を繰り返し行うのは、むしろ、その実験をまだ自分が笑い飛ばせるのだということを確認するためであるかのようにある。

彼がそれを笑い飛ばすことができるということが示しているのは、祖父(ホイニツキーに即して祖父の象徴を読み解けば歴史・伝統)との関係の中で自分自身の立つ位置を自分と祖父との関係の外からはっきりと定めることができ、また、自分自身を中心に据えて祖父の行為を相対化する事ができていることによっている。すなわち錬金術の実験という「繰り返し」、自分自身もその中に含まれている祖父から引き継がれてきたものへのホイニツキーの哄笑は、決して彼の祖父に一義的に向けられているのではなく、祖父に向けられているのと同じく、祖父の行為を繰り返す自分自身にも向けられているのである。

つまり、ホイニツキーにとっての祖父は孫によって理想的な像を投影されていない祖父であり、カール・ヨーゼフの場合しばしばそうであるような祖父以上の存在ではない。そして彼が行う祖父の行為の「繰り返し」は、カール・ヨーゼフが行うような祖父への盲目的な回帰ではなく、その反対に祖父を相対化するため、自分の立つ地平を再確認するために行われるものなのである。

6. カール・ヨーゼフの世界

では、もう一度カール・ヨーゼフに視線を戻してみよう。

カール・ヨーゼフはデーマントの遺した忠告にもかかわらず軍隊に残る。彼が「祖父の暗い神秘的な眼差し」から解放されるには、デーマントが道を示すだけでは足りなかった。しかしそれでも、デーマントの死はカール・ヨーゼフに、かつては絶対的な尺度をもっていた祖父の像の相対的減価を呼び起こしたことは確かであろう。

そうしてその一方でカール・ヨーゼフの生の高揚とでも言うべきものが語られる。それはフォン・タウスキヒ夫人との恋愛によってはじめて起こるのである。かつて彼が経験した恋愛は、スラーマ夫人との情事も、そして、デーマント夫人との場合も、カール・ヨーゼフには共に死しかもたらさなかったが、フォン・タウスキヒ夫人との恋愛は刹那的な生の輝きをもたらすのである。

彼はこの瞬間自分がどんなふうにしたら力強くなれるかを知った。彼は自分の平凡な運命に腹が立った。彼は光輝に満ちた運命を欲した。もし役人になっていたとしたら、彼がきっともっているに違いない精神的な長所のいくつかを有効に使って、出世をするチャンスがあったかも知れない。平和なときの将校とはなんだろうか。ソルフェリーノの英雄でさえも、戦争で彼がしたこと何を得たというのだろうか。(324f)

カール・ヨーゼフはフォン・タウスキヒ夫人とはホイニツキーの紹介で会おうのだが、このことは、先に述べたようなホイニツキー伯爵という人物の造形をカール・ヨーゼフの人物造形との対比の中で見ると極めて暗示的である。

カール・ヨーゼフはフォン・タウスキヒ夫人との恋愛の中で、ひとときのあいだ生気を蘇らせ、祖父をはじめとする死者の世界、過去の世界から離れて、現在の生の領域へと足を踏み入れることができたのである。だからこそ、タウスキヒ夫人とカール・ヨーゼフがウィーンで行動を共にしているとき、それまでほとんど常にとっていいほど、イロニーとさまざま老衰と没落の象徴を帯びて描き出されてきた君主国が、光と輝きと色彩、そして、ざわめく街の人々の立てる騒音に満ちた情景の中に描かれるのである。

この恋愛によって、カール・ヨーゼフが自己と比較する基準としての祖父の絶対的な価値は大きく揺らぎ出しているのは明かである。

祖父のソルフェリーノの英雄は財産を遺していったのだろうか。それをいつか父から相続することがあるのだろうか。今までにそんな考えに馴染んだことは一度もなかったのに。(中略)そして見たまえ、ヨーゼフ一世に従属せず、独自の軍隊をもち、大小の守備隊に何千という少尉のいる異国があるのだ。これらの外国ではソルフェリーノの英雄などと言う名前は何の意味もないのだ。そこにも君主というものが存在する。そうしてこれらの君主たちにも彼らの命の恩人というものがいるのだ。こうした考えに耽るのはひどく心を混乱させられることだった。それは君主国の一少尉にとっては、われわれにとって地球が何百万という天体の一つにすぎず、銀河にはさらに数え切れないほどの太陽があり、それらの太陽がそれぞれ惑星をもち、人間などというものは従ってつまらない個体、少々乱暴な言い方をすれば、一塊の芥なのだという考えがそうであるように、心を混乱させるものだった。(328f)

ここではもはやソルフェリーノの英雄は唯一無二の皇帝の救い手ではない。彼自身のひな型として像を結び続けてきた祖父の姿、父の家の喫煙室の薄暗い影の中からじっと彼を見つめ監視し続けてきた祖父の視線は、広大な生の世界へと開かれたカール・ヨーゼフの心の中で、それがかつて占めていた特権的地位を開け放し、そのほかのものと同じ地平に引き下ろされているのである。カール・ヨーゼフが祖父をここで、祖父を彼の偉業と結び付けて考えるのではなく、祖父の遺しているかも知れない財産と結び付けているのは、そのひとつの現れであろう。

フォン・タウシヒ夫人との恋愛によってなるほど確かに一面的には、カール・ヨーゼフは彼を縛り付けていたものから解放されたといえるかもしれない。しかし、それは一時的なものであって、完全な解放とは言えないだろう。というのもこの恋愛もそれ以前にカール・ヨーゼフが体験した二つの恋愛、すなわちスラーマ夫人そしてデーマント夫人との恋愛同様に不倫関係であり、またこの場合はさらに、フォン・タウシヒ夫人は忍び寄り老いを気にする中年女性として描かれていることも加わり、それはかつてスラーマ夫人が出産の床で死を得たことが象徴的に示しているように、新しい世代を生み出し、未来へと続く性質のものではなく、彼女との関係はあくまでもカール・ヨーゼフの軍隊での日常の小休止

にすぎないからである。またカール・ヨーゼフはこの恋愛の後もまだ軍隊にとどまり、次のように問うのである。そして皮肉なことにこの自問の直後に図らずも、祖父の行為の「繰り返し」、出来損ないの「繰り返し」とも言える肩の負傷を負うという事件が配置されているのである。

自分がこの場にふさわしい人間ではないのだという確信が彼を襲った。それではいったいどこに属しているというのだろう、と彼は小隊が次の命令を待つ間に自問した。それではぼくはどこに属しているのだ。あの居酒屋に座っていた連中にはない。ひょっとするとジボーリエにだろうか。父祖のまた父祖たちにだろうか。鋤がぼくの手にはふさわしいので、サーベルはふさわしくないのだろうか。(335)

カール・ヨーゼフは、かつて祖父が自らの肖像画を見ながら自分の本来の顔について思いを巡らしたのと同じように、このとき本来の自分の姿に思いを巡らしているのである。カール・ヨーゼフは本来の自分の姿として明らかに祖父の姿に救いを求めている。彼の求めるものはここでもトロッター族の連鎖の中で延々と連なってきた農夫と、今現在彼がそうであり、自分自身のあり方に疑問を抱かせている軍人という二つの存在のあり方をその一身の内に統合している人物の姿、つまり、祖父の姿である。あくまでもカール・ヨーゼフがここで想起している祖父は、その体の中に祖先につながる農夫の血をもちながら、軍人として皇帝の命を救い、英雄になった人物であり、それは幼年時代からカール・ヨーゼフがなれ親しんできた彼の幻想の中の祖父である。¹⁴⁾ ここでその祖父を想い、今現在の自分を比べるカール・ヨーゼフは、フォン・タウスイヒ夫人と王都で過ごした日々
の輝きを完全に失い、再び、祖父との「比較」の中で重圧に喘いでいる。

カール・ヨーゼフがフォン・タウスイヒ夫人との恋愛によっても祖父との「比較」、祖父の行為の「繰り返し」という呪縛から、決して完全には逃れていないことは明らかである。「彼の全人生は失敗だったのだ」(378f)という考えが彼を圧倒してしまうのは、彼が優柔不断に軍隊にとどまり続けているからであり、彼が英雄となった祖父と同じ軍人という道を歩き続けているからである。デーマントの忠告を思い出して、彼がついに軍隊を去る決意を固めるのはようやく、皇太子暗殺の報せを聞いたときであった。カール・ヨーゼフは皇太子の死を軍人として守るべき祖国の崩壊、世界の没落と解している。それゆえ、彼の軍隊を辞めよ

うという決意は、論理的に正当な決意になると言える。というのも世界の崩壊と
言うのは、ソルフエリーノの英雄が救ったその世界が崩壊したということであり、
カール・ヨーゼフが軍隊にいて守ろうとする対象が消滅したということなのであ
る。

老ジャックは死んでしまった。ソルフエリーノの英雄は死んでしまった。連隊
付き医官ドクトル・デーマントは死んでしまった。「こんな軍隊はやめたまえ」
と彼は言った。ぼくはこんな軍隊はやめよう、と少尉は考えた。おじい様も軍
隊を去ったのだった。(424)

そう決意したとき、彼は突然また首筋に祖父の視線を感じる。視線を感じるだ
けでなく、ソルフエリーノの英雄その人と合一し、上官に「黙れ」と命令するの
である。¹⁵⁾ このとき彼が同一化するのには、肖像画に描かれ、彼の幻想を育んでき
た祖父である。しかしその祖父は果たして軍隊における英雄としての祖父であっ
たのだろうか。というのもこのときすでに彼は軍隊を辞める決意を固めているか
らである。このとき彼が同一化する祖父、それは名もないのスロヴェニアの農夫
の系列に連なる、一介の少尉にすぎなかった貴族に列せられる以前の祖父であろ
う。

「まだ故人の悪口を言う者がいたら」とカール・ヨーゼフは続けた、「そいつ
を俺が撃ち殺してやる。」彼はポケットに手をつっこんだ。酔っぱらっていた
ベンキエが何かぶつぶつ言い始めたので、トロッタは「黙れ」と叫んだが、
その声は借り物かと彼には思われるほどの大音声であり、ひょっとしたらそれ
はソルフエリーノの英雄の声だったのかもしれない。彼は祖父と一体になった
のを感じた。おれ自身がソルフエリーノの英雄なのだ。父の喫煙室の装飾天井
の下にぼんやりとかすんで見えるのは、おれ自身の肖像画だ。(424f)

彼は辺境の駐屯地のハンガリー系将校たちの罵倒から、ハーブスブルク君主国
の世界の名誉を守るために、かつて祖父が行ったのと同じ軍隊内の階級上許され
ない行為を行うことになる。そこにおいて上述のように祖父との合一がみられる
のは確かである。しかしここで重要なのはやはり、彼の行った行為が君主国の今
後の存続に関わるものではなく、あくまでも、君主国の遺骸の名誉に関わるもの

であったという点である。つまり、彼の行為は祖父の行為と決して等価のものではなく、結局、ここで起こる孫と祖父の合一は、カール・ヨーゼフの内面で起こった飛躍の現れでしかなく、それはむしろ欺瞞的とさえ言えるものである。

カール・ヨーゼフは皇太子の死によって、ホイニツキーが予言した帝国の崩壊、世界の没落が現実のものとなったと感じた。カール・ヨーゼフにとって、かつて彼の祖父がその崩壊から救った世界が崩壊したのである。カール・ヨーゼフが、祖父の視線という形で、軍人として守ることを、そして英雄の孫として彼が生きていることを強要されてきた世界が崩壊したのである。

そのことによってカール・ヨーゼフを常に圧迫していた、英雄としての祖父に対する劣等感は、もはや彼にとって意味を持たなくなる。彼が乗り越えようともがき苦しんでいた英雄である祖父との「比較」も英雄である祖父の行為の「繰り返し」も、彼によって乗り越えられたのではなく、君主国の時代の終わりとともに、その求心点を失い、雲散霧消してしまうことになるのである。

しかし物語の基本的モチーフとしてのカール・ヨーゼフとソルフェリーノの英雄の間にある「比較」と「繰り返し」の関係の描写は決してこれで尽きた訳ではなく、なお最後にカール・ヨーゼフの死の場面において語り手は、カール・ヨーゼフの体験を介することなく、見かけ上客観的にその死を評価しながら次のように語るのである。

ソルフェリーノの英雄の孫の最後はこんなにもあっけなく、オーストリア・ハンガリー二重帝国の小学校および高等小学校の読本に扱うにはふさわしくないものであった。トロッタ少尉は武器をもって死んだのではなく、手に二つのバケツをもって死んだのである。(445)

語り手はあえてソルフェリーノの英雄と孫の死を対比させ、イローニッシュな表現を用いている。語り手はカール・ヨーゼフの死が祖父の行為の出来そこないの「繰り返し」であるかのように語るのである。

確かにこの死の場面では、祖父の英雄的行為との対照がはっきりと浮かび上がってくる。が、しかしこの相応には、カール・ヨーゼフがかつてソルフェリーノの英雄の孫である軍人として軍隊に勤務していた頃にあった、そしてカール・ヨーゼフを窒息させるかのような祖父との対比とは明らかに異なる要素が新たに混ざっていることに気がつく。それは華やかな『ラデツキー行進曲』の響きであ

る。彼の死は戦場を飛び交う銃弾によって奏でられる行進曲によって彩られているのである。そしてそれはむしろカール・ヨーゼフにとってもっとも望ましい死であった。(160) 彼の死は決して祖父の英雄的行為の出来そこないの繰り返しなどではなく、それどころかある意味ではかつて幼年学校に通っていた頃に彼の脳裏にあった輝かしい死の実現であった。¹⁶⁾

それにもかかわらずなぜ語り手はこのようなイロニーシュな語り方をするのであるか。

ここで提示されている「武器」と「バケツ」という小道具の相違に特徴づけられる対照は、ソルフェリーノの英雄とカール・ヨーゼフとのあいだにある違いをそのまま反映している。祖父の英雄は世界の支柱としての皇帝を、一方、カール・ヨーゼフは部下の実は農夫たちである兵を救うために命を賭したのだととれる。カール・ヨーゼフが戦った第一次世界大戦という戦争は「孫の世代の戦争」(438)であった。また、カール・ヨーゼフの死は農夫たちのキリストをたたえる言葉をともなって描かれる。それはヨーゼフ・トロッタが皇帝から激励の言葉を受けたのと、格好の対照をなしている。このことはこれらの対照に語り手が二人の人物と二つの時代の対照を仮託していることを示しているように見える。

カール・ヨーゼフの死は、貴族としてではなく、農夫として暮らしていたカール・ヨーゼフが、戦争の勃発と同時に軍隊に戻り、まもなく戦死するということから、貴族としてのトロッタ家の一員の死として捉えるべきではないだろう。というのも、すでにカール・ヨーゼフにとって祖父が命を賭けた君主国はすでに瓦解し、失われていたからである。その反面、カール・ヨーゼフの死は、ソルフェリーノの英雄の皇帝の命を救うための行動と対応した、皇帝という支柱を失った後の世界、本来は農夫である兵卒たちを中心に迎えた世界への殉死として安直に捉えることは非常にたやすい。¹⁷⁾ が、しかしそれには釈然としないものがつきまとうのも事実である。

カール・ヨーゼフにとってこの農夫の世界とは、近代になってなお中世的な構造を保ち続けたハーブスブルク君主国の世界の根底にあった世界そのものであり、決して君主国崩壊後の新しい時代を象徴するものではなく、むしろそれは旧世界そのものであったというべきだろう。また、そもそも君主国の崩壊を認識した後にまるで時の流れに逆行するかのように父祖の息づいてきた大地に回帰しようとしたカール・ヨーゼフにとって、君主国後の世界・時代が何らかの意味を持っていたのかということ自体が、疑問視されるべきである。

カール・ヨーゼフは軍隊を辞め、宣戦が布告される直前まで「軍隊における歳月も、まるで今までいつも手に杖を持って畑や国道を歩き、腰にサーベルを吊るしたことなど一度もなかったかのように消え失せていた。祖父のソルフェリーノの英雄のように、またラクセンブルクの城内公園の廃兵であった曾祖父のように、そしてまたおそらくジボーリエの百姓であった、名もない、会ったこともない祖先のように彼は暮らしていた。」(435) 彼にとって毎日歩いて渡る鉄道の線路が通じているはずの広い世界は、もはや存在していないのである。

祖父ヨーゼフ・トロッタは決して国家元首としての皇帝の命を救うという意図のもとに動いたのではなく、単に皇帝が象徴している彼自身の世界を守るために動いたのだが、カール・ヨーゼフが命を投げ出したその行動は、あるいは祖父のその行動の動機以上に、政治的な意味合いが薄いものであることに注意しなければならない。彼は農夫たちの中に自己を同一化し、農夫たちのために水を手に入れるようとして死ぬのである。そして名もない敬虔な農夫たちが、かつてヨーゼフ・トロッタにとって皇帝が意味していたものを、カール・ヨーゼフにとって意味していたのである。後にソルフェリーノの英雄になるヨーゼフ・トロッタにとって、皇帝の死は「彼自身を、連隊を、軍隊を、国家を、全世界を破滅させる、考えられないような、途方もない破局」(140)を意味していたのである。そして皇帝によって支えられていた世界の崩壊後を生きるカール・ヨーゼフにとって、農夫たちは彼が求めていた世界の内実を保持しているものだったのである。

カール・ヨーゼフは、結果的に英雄となった祖父が救おうとしたものと本質的に同質なもののために、つまり、自分の世界、かつてカール・ヨーゼフが憧れ望んだ世界のために死んだのである。彼が憧れ望んだ世界とは、祖父がその英雄的な行為によって君主国の国家機構の中に取り込まれてしまう前に所属していた世界であり、それに対するカール・ヨーゼフの憧れは非政治的な、自分自身の存在・自我を安定した確かなものにしたいという欲求に由来するものにほかならないのである。そしてそれは実は、軍隊を辞める決意の直後にカール・ヨーゼフに祖父との合一を可能ならしめたもの、皇帝の命を救うことになった行為を祖父ヨーゼフ・トロッタに行わせた動機の内面性と軌を一にするものである。

さて、このように読んだとき、このカール・ヨーゼフの死の場面におけるイロニッシュな表現にわれわれは、国家によって創り出される英雄的な行為や、完全には決して実現しない祖父の生の「繰り返し」をギリシア神話のシーシュポスのように「繰り返し」続けてきたカール・ヨーゼフの生に対する皮肉だけではなく、

語り手の、すなわち、カール・ヨーゼフと共時的にこの物語に描かれている時代を体験したヨーゼフ・ロートの、歴史の不条理、個人の生を否応なく巻き込み、踏みしだいていく歴史の無情な流れに対するやりきれない気持ちを汲み取るべきなのではないだろうか。

結びにかえて ―繰り返しと全体―

この物語全体はすでに見てきたようにさまざまなヴァリエーションに転じる相似や近似といった照応関係や繰り返しに満ちている。それは主筋であるトロッタ家の祖父と孫の関係に繰り広げられ、さらにその周辺に木霊を呼び起こす。

また今まで見てきたのとは異なる繰り返し、規則的な繰り返しのモチーフを見ることができる。それは第十章に詳細に語られているフランツ・トロッタの日々の運びにもっともよく現れている。フランツ・トロッタの生活に現れているのは十年一日のごとき旧オーストリア君主国、中世から生きながらえてきた帝国に染み着いたリズムである。このリズムが狂うとき、¹⁸⁾ フランツ・トロッタの世界は瓦解し、君主国の世界は没落していくのである。そしてフランツ・トロッタ自身もまた死へと向かって行くのである。

ハーブスブルク君主国の心音である繰り返しと終始変わらぬリズム、この二つを象徴するのが『ラデツキー行進曲』なのである。

日曜日ごとにネヒヴァル氏の軍楽隊はラデツキー行進曲を演奏するのだ。週に一度、日曜日には、オーストリアが健在なのである。白髭のびかびかと光る水っ洩を鼻の下に垂らした健忘症の老人である皇帝と、老フォン・トロッタ氏がオーストリアなのだ。(424)

この物語のタイトルとなっている『ラデツキー行進曲』という音楽は、行進曲という性格上、無限に繰り返されうる構造となっている。また視点を逆転すれば、行進が続いているあいだは少なくとも、行進曲は同じ楽想の繰り返しによって構成され続ける。つまり行進曲全体は無数に連なる似た形をしたモチーフの連続によって構成されている。

このハーブスブルク君主国を象徴する行進曲のタイトルを題名にとった物語

は、本稿で数え上げた登場人物たちの生に見られるいくつかの比較や対比といった照応関係や繰り返しの連鎖を行進曲のモチーフに見立てることによって、君主国の最後の数年間の時代の歩みをその作品構造自体から描き出していると、考えることもできるだろう。

註

本稿ではテキストとして次のものを使用した。

Joseph Roth: Werke. Herausgegeben von Fritz Hackert und Klaus Westermann. Köln 1989/1991.

なお、本文中の引用文に付記した括弧内の数字は上記の全集の第五巻, Joseph Roth Werke 5, Romane und Erzählungen 1930-1936. のページ数を示している。

また本文中で行った引用の訳文作成には、『筑摩世界文学大系63ホーフマンスタール／ロート』所収の柏原兵三訳を適宜参照した。

- 1) 『ラデツキー行進曲』は1932年4月17日から同年7月9日まで、Frankfurter Zeitung 紙上に連載された。なおそのときのタイトルは『Der Radetzky-Marsch』であり、後に単行本として出版されるに当たり、『Radetzky Marsch』に変更された。
- 2) 原題 „Vorwort zu meinem Roman: Der Radetzky Marsch“ は同じく1932年4月17日 Frankfurter Zeitung 紙上に発表された。引用は上記全集の Anhang より行った。In: Joseph Roth Werke 5. S. 874-875.
- 3) Helmut Famiira-Parcsetich: Die Erzählsituation in den Romanen Joseph Roths. Bern, Frankfurt 1971. S. 93-94.
David Bronsen: Joseph Roth. Eine Biographie. Köln 1974. S. 398
- 4) Famiira-Parcsetich, S. 89-91.
- 5) Claudio Magris: Der habsburgische Mythos in der österreichischen Literatur. Salzburg 1966. S. 257.
Magris はここで直接的にはロートの1920年代の作品、中でも『果てしなき逃走 (Die Flucht ohne Ende)』(1927) をさして、ロートの語りの方は「歴史的な事件と内的経験を無理に結び付けようとする事なく、個人の運命の内幕から、ある時代全体の、そして政治的-社会的状況全体の姿を描く」ものであるとしているが、このことは『ラデツキー行進曲』にも同じく言えることであろう。
- 6) Hansjürgen Böning: Joseph Roths „Radetzky Marsch“. Thematik, Struktur, Sprache. München 1968. S. 177-178.

Böning はこの作品に多数見られる呼応や反復、類似を指摘し、それらを Parallelismus と総称している。

- 7) Bronsen, S. 402-403.
- 8) Maud Curling: Joseph Roths Radetzkymarsch. Eine psychosozilogische Interpretation. Frankfurt am Main 1981. S. 27-34.
- 9) Vgl. Hartmut Scheible: Joseph Roth. Mit einem Essay über Gustave Flaubert. Stuttgart, Berlin, Köln, Mainz 1971. S. 93-94, 103-104.
- 10) Bronsen, S. 410.
- 11) Vgl. Curling, S. 101-104.
- 12) Vgl. ebenda, S. 94.
- 13) Vgl. Werner Sieg: Zwischen Anarchismus und Fiktion. Eine Untersuchung zum Werk von Joseph Roth. Bonn 1974. S. 133.

Böning, S. 86.

Curling, S. 105.

Sieg はホイニツキー伯爵をカール・ヨーゼフのような人物に対する Gegengestalt とし、また Böning は Kontrastfigur としている。

- 14) Vgl. Curling, S. 49.
- 15) Vgl. ebenda, S. 48.

Erik H. Erikson の主張したアイデンティティの概念を『ラデツキー行進曲』の解釈に援用した Curling は、このシーンにおいてカール・ヨーゼフは「彼自身であることから、非常に大きく隔たっている」としている。

- 16) Vgl. Scheible, S. 133-134.
- 17) Vgl. Sieg, S. 77.

Scheible, S. 132.

Curling, S. 50.

Sieg はカール・ヨーゼフの死を、ウクライナの農夫たちのため、新しい世界秩序のための「殉死 (Opfertod)」と捉えている。一方 Curling は、銃弾の雨の中に水を汲みに飛び出したというカール・ヨーゼフの行動は「どうにかして祖父に匹敵したいという潜在的に存在し続けていたトロッタの願望から発した反射」であるという Scheible 考察を支持して、「カール・ヨーゼフの死は自殺でも (Geißler の言う意味における) 『民主主義的な大衆社会の新しいエートス』のしるしとしての殉死でもない」とした上で、「カール・ヨーゼフの死 (Tod) は、祖父と同じ英雄というあり方とそれに対する彼の無能力との間の葛藤の中でのなほど英雄的な死を夢想してはいるが、死ぬことができないことによって起こった、副次的、偶発的な死 (Sterben) であった」としている。

- 18) Vgl. Bronsen, S. 416-417.